

第3章 ネーデルラントから見た地中海

はじめに

古来、ネーデルラント地方は今日にいたるまで、ヨーロッパ大陸の北西端という地理的位置によって、交通の要衝であった。また、一二世紀以降のヨーロッパ経済の革新の中心地にあつたため、人と文物の行き来が激しかった。この地方の経済的盛衰は、もとより時代によつて、また地域によつて微妙な差異があつたが、中世から近代初頭にかけての時期、そしてその後の停滞した一時期を別として、工業化経済の時代以後において、つねにヨーロッパ経済の中核的位置をしめた。

ネーデルラント地方は、別名低地地方とも呼ばれるなだらかな平地で、その北半分はライン川の河口地帯であり、中世から干拓がさかんな地である。オランダでは国土の四分の一が海面下にあるポルダーと呼ばれる干拓地からなつてゐる。その東側に隣接する大陸の内陸地域、ライン下流地域を介して今日のドイツ、そして南側に接するフランスと歴史的に密接な経済、交易関係、そして政治的・文化的な関係をもつてゐる。他方で、ドーバー海峡を隔てた英国とも強い結びつきをもつていた。英国は、一四世紀以降農村

における市場経済の勃興によって経済力を高めていき、毛織物製品の原料である羊毛の供給国から毛織物輸出国へと転換し、そのことがネーデルラントにおける地域間、都市間の浮沈に多大な影響をおよぼすことになる。

そして、この地方は中世ヨーロッパの中継商業の中枢の一つであったイタリア、とりわけ北イタリア諸都市と、中部ドイツをあいだにはさんで結びつきを強めていくことになる。ネーデルラントとイタリアとの強固な交易関係は、一六世紀になって独特のヨーロッパ大陸縦断内陸交易の隆盛という頂点を極めることになる。この交易商業の流れは、両地域間を結ぶ交易の糸としてだけでなく、その両端に英国とレヴァント、中近東地域をも含むという、すぐれて「世界的な」意味をもつ経済的実態であった。さらに、西地中海のイベリア半島世界との結びつきは、アメリカ「発見」より以前から強固なものがあつた。地中海を越えた「拡大地中海」ともいふべき大西洋に、一五世紀に乗り出していく植民活動にフランドル（ネーデルラントの一地方名）の商人もかかわっていたのである。

こうしたネーデルラントと地中海との深いかわりは、やがて一六世紀の後半からのヨーロッパの相次ぐ戦乱の時代に翻弄され、三〇年戦争（一六一八―四八年）に突入して繁栄の時代に訣別することになる。一七世紀は、「オランダの世紀」ともいわれ、繁栄のあり方は一六世紀と同じものではなく、成立しつつある国家を背景にした再編された姿で登場することになる。コスモポリタンなヨーロッパ世界のあり方、交易と商業に体现された人どものポータレスな動きは、国境と戦乱によって大きな制約を受けることになる。中世から近代初頭におけるヨーロッパの経済交流の実態をネーデルラントとイタリアの交易

において、またネーデルラントとイベリア半島との商業について、つかのまの繁栄と共生に見ようとするのが本章の狙いである。

1 中世のネーデルラントと地中海

世界市場ブリュージュ

「多数の土地から来る多数の商人の同時の存在が、ブリュージュに『世界市場』の地歩を与えたものと考えられる。というのは、アフリカとアジアは、地中海を通じて、ヨーロッパと旧世界全体と結びついているからである」とは歴史家ファン・ハウテの言葉である。フリッツ・レーリヒもまたブリュージュを「中世の世界市場」と名づけた。一二七七年、ジェノヴァのガレー船（オール付きの帆船）がブリュージュやアントウェルペンに來訪するようになり、一三一四年にヴェネツィアのガレー船団がブリュージュに來た。一四世紀になると、イタリアとの直接の海上交易も本格化するようになる。このイタリア商人が定着したのがブリュージュであった。彼らは、出身都市別に居留商人団体をつくり、やがてはそこで領事を選出し、自治権を獲得するようになっていく。それは彼らの財力とその商業知識の蓄積によるものであった。この時代に、ブリュージュにはどれほどの外国商人がいたのであろうか。その詳細を物語るデータは乏しいが、一四四〇年の人数として、ハンザ一三六八人、スペイン四八八人、ヴェネツィア四〇人、ジェノヴァ三六八人、フィレンツェ二二二人、ルッカ一二人という数字がある。しかし、ポルトガルやカタルーニャの

数字は不明である。

一五世紀の前半において、ジェノヴァやヴェネツィアのカレー船がプリュージュに立ち寄り、みょうばん明礬や木綿、染料、ワインを売り、帰り荷に英国産の羊毛や毛織物を持ち帰った。

この時代のプリュージュのヨーロッパ経済における位置をよく示す叙述として引き合いに出されるのがオリヴィエ・ド・ラ・マルシェの年代記の記述である。一五世紀の年代記作者オリヴィエ・ド・ラ・マルシェは、ブルゴーニュ公シャルル豪胆公と英国国王エドワード四世の娘マーガレットとの結婚を祝って、翌一四六八年に催された祝典を記録しているが、そのプリュージュにおける行進のなかに、イタリアやスペイン各地の商人が豪華な衣装を身にまとった姿が描かれている。行進の先頭には、馬に乗ったヴェネツィア人が陣取り、次いでフィレンツェ人、スペイン人、ジェノヴァの商人がつづく。しかも、その人数は多い。マルシェは、フィレンツェ商人一人、スペイン商人二四人、ジェノヴァ商人にいたっては、「白いダマスク織の服を着て馬に乗った一〇八人の商人」が「同数の従僕をしたがえて」行進したと叙述している。この行進に見られる富裕な南欧商人の姿は、彼らが当時この都市で受けていた処遇とその位置をよく示しているといえる。

フィレンツェの有名な金融貿易商家であるメディチ家も、ネーデルラントにおける拠点をこのプリュージュにおいた。コシモ・デ・メディチは、一四三九年にベルナルド・ポルティナリをプリュージュでの代理人に指名したが、ここで活発な交易、金融活動を展開した。先に述べたシャルル公の祝典行進でフィレンツェ人を率いたのは、メディチ家のプリュージュでの差配役を務めるトマソ・ポルティナリであった。

ところで、この一五世紀において、ブリュージュを舞台としてしだいに一つのミニ世界経済ともいふべき新しい経済の動きが築かれていった。すでに、一四世紀のはじめにはマデイラ、カナリア、アゾレスの諸島が発見され植民が進んでいたが、有名なポルトガルのエンリケ航海王子（一三九四―一四六〇年）のイニシアティブによって、アフリカ西海岸が探検航海されていった。彼の在世中にポルトガルはボジャドール岬を発見し、一四四六年にはギニアに達していた。これらの島々やアフリカ西岸で手に入れられた象牙やマラゲットといわれるアフリカ産香料、金、のちになると砂糖などの植民地物産の市場となったのが、ブリュージュであった。ポルトガルはアフリカ交易をおこなう上で、対価として必須の貴金属や金属製品を調達するためにもネーデルラントに赴く必要があった。そして、この交易を担った商人のなかに、ブリュージュのデスパルス商会のようなネーデルラント商人の活躍があった。砂糖キビはマデイラ島にシチリア島から導入され、一四五五年にその生産が開始された。一四五〇年から七〇年頃にかけて、ブリュージュ商人のファン・ウエルテやファン・テル・ハーゲンなどがアゾレス諸島の植民に参加している。トウルネーの商人エウスターシエ・ド・ラ・フォスは一四七九年アフリカ西岸を探検しつつ交易活動をおこない、香料や奴隷を銅製品と交換しているが、この頃、何人ものフランドル商人がリスボンに滞在してアゾレス諸島やマデイラ島とフランドルとのあいだで活動している。

この頃から北ヨーロッパがしだいに砂糖の消費量を増大しはじめ、リスボンとブリュージュとのあいだで、従来の中世的交易には見られなかったタイプの、いわばミニ世界経済ともいえる交易圏をもつ商業交易が成立した。のちに大西洋をはさんでヨーロッパとアメリカ世界（カリブ海）のあいだで展開される砂

糖生産とその交易のひな型が、ヨーロッパと北アフリカ諸島とのあいだで一五世紀において形成されたのである。その舞台がマデイラ島とブリュージュであり、アントウエルペンの砂糖精製業であった。

ポルトガルのネーデルラントにおける本拠地は長らくブリュッヘにあつて、この地で一三八六年から在外商館を設置し、「居留商人団」を組織していた。そして、一四三八年にブリュージュ市から得た特権で、領事を選出することができるようになる。

アントウエルペンの発展

アントウエルペンは、一四世紀にライン地方を後背地として毛皮やワインの有力な市場となつていたが、一五世紀に入つて飛躍的發展を遂げていく。その背景には、英国の毛織物輸出の成長という経済的転換があつた。英国からの毛織物の輸出攻勢は、フランドルの毛織物工業に打撃を与えたが、アントウエルペンは一貫してこの英国産毛織物を積極的に受け入れたために、ネーデルラント内部において際立つた対応の相違が地域間・都市間のレベルで顕在化したのである。ところで、一四一―一五世紀の中葉までは、英国製の毛織物の地中海、そしてレヴァント・中近東向けの輸出は、必ずしもネーデルラントを經由することはなかつた。しかし、ジェノヴァやヴェネツィアの商人によつて海路、英国製の毛織物が地中海、さらにはアレクサンドリアなどへ、しだいに大量に輸出されるようになる。

アントウエルペンが英国毛織物の交易地として發展したのは、その都市がケルンの商人を介して中継交易の拠点となつたことが重要であつた。イギリス毛織物の購入者としてケルン商人が登場したのである。

アントウエルペンには、英国商人、つまり毛織物輸出貿易商人団体であるマーチャント・アドヴェンチャラーズが進出し、ケルンをはじめとするドイツ商人が同市に毛織物を購入するためにこの都市を訪れた。このことがアントウエルペン市場を国際的位置に押し上げたのであった。アントウエルペンは、英国製の毛織物をたんに取引する市場都市にとどまらなかった。この都市は、そこで受け入れた英国製毛織物を染色し仕上げる工業都市となっていた。当時の工業においてしめる毛織物工業の位置からして、アントウエルペンは当時の先端的工業都市となつたのである。

ところで、それまで衰退の道をたどっていたとはいへ、国際的工業としての地位を保っていたブリュージュなどの都市を軸とするフランドルの都市毛織物工業の利害は、統治者の交替によって劇的な変化をこゝむることになる。一四七七年にシャルル豪胆公がナンシー郊外でフランスのルイ一世に敗れて戦死したあと、ネーデルラントの実質的統治者となつたハプスブルク家のマクシミリアン大公との対立によって鮮明なかたちをとることとなつた。一四八〇年代において、ブリュージュは同市を訪れたマクシミリアンを一時幽閉する手段をとつたが、その報復はフランドルに手厳しかった。最大の痛手は、ブリュージュに居をおく外国商人に対する退去命令であつた。こうして一五世紀の末に外国商人の多くはブリュージュを去り、アントウエルペンに向かうこととなつた。

ちようどこの時期にヨーロッパの商業世界を根底から揺るがすような地殻的变化が生じた。世紀末にヴァスコ・ダ・ガマによるアジア航路の開発という大事業として実を結び、それより以前にコロンブスの「新世界」到達という、ヨーロッパ側から見れば革命的ともいえる「世界」の拡大という事態が生じたの

である。ポルトガル人が、直接インドに行き、そこでヨーロッパ人が求めていた胡椒などの香料を手に入れることができるようになり、一五〇三年以後には、リスボンで胡椒がヴェネツィアの五分の一の値段で販売されるようになった。これは、それまで「トルコから栄養分を得ていた」(ブローデル)といわれるほどアジア物産の独占的中継商業によって利益を得ていたイタリア都市、ヴェネツィアやジェノヴァなどの商業基盤を掘り崩す契機となっていくのである。

2 一六世紀のアントウエルペン市場と地中海

アントウエルペンの繁栄

一六世紀の開幕を告げる一五〇一年、ポルトガルの香料を積載した船舶がはじめてアントウエルペン港に向かってスヘルデ川(シェルト川)を遡っていった。そして一五〇三年以後、この交易の流れは頻繁になっていく。ところでこのポルトガル香料のアントウエルペン市への到来こそ、この市場をますます世界的市場へと押し上げた決定的要因であった。それはアントウエルペンがブリュージュにかわって北欧を南欧に結びつける役割を果たしたからにはかならない。ここに、ファン・デル・ウエーが「リスボン・アントウエルペン商業軸」と形容した結びつきが形成されたのである。また、ジャンンは、同市の世界市場への上昇を、「この地にヴェネツィアやリスボン、それにロンドンからと同じようにタンツイヒやライプツイヒからも人びとが訪れた」と表現している。アントウエルペンは英国産毛織物の販売地として培った

長い伝統の基盤の上に、いまや地中海商業の花形であった香料取引を引きつけ、ヴェネツィアでは厳しい統制のもとで香料確保のためにやむなく銀銅をさばかざるをえなかった南ドイツ商人をも引きつけたのであった。香料取引を独占することで、香料と銀銅取引のヘゲモニーを握ることができたイタリア都市の実権が、一挙にアントウェルペン市場に移ったということである。まさしく、地中海から大西洋への「商業革命」の時代であった。

こうして、ポルトガルもヨーロッパ向けのアジア産香料ルートを手に入れても、その香料を売るにはネーデルラントに赴かなければならなかった。ブリュージュにおいて見たように、リスボンでは香料の販売は難しく、アジア取引を営む上で不可欠の対価としての金属を獲得するには、アントウェルペンに進出していたフッガー家などの南ドイツ商人に頼らなければならなかったからである。さらに一五〇八年に、ポルトガル王室は「インド商館」（カサ・ダ・インディア）の支部として「フランドル商館」をアントウェルペンにおいたが、この年、ポルトガル王室は、アントウェルペン市場における香料の独占的販売権をイタリアのアファイターデイ家とグアルテロツティ家に売却した。この独占は一五一四年までつづいた。海路による大量の胡椒の到来と販売は、イタリア経由の香料ルートを根底から掘り崩していった（その後一時、レヴァント・地中海経由の香料取引は回復したとはいえ）。

以上見てきたように、アントウェルペン市場の国際的性格、世界性は、一五世紀中頃からのヨーロッパ経済全体の高揚を背景にして、英国毛織物取引との結合を基盤とし、その上に、南欧商人、ハンザ商人に担われた遠隔地取引がつけ加わることによって付与されたものといえるだろう。アントウェルペンでは、

ブリュージュにおけると同様、外国商人はその多くが居留団と呼ぶべき組織を有することが認められた。しかも、ブリュージュやヴェネツィアなどと違って、アントウエルペンでは、外来商人の交易活動がほぼ完全に自由に営むことが可能であったことも、国際的位置への上昇に拍車をかけたといわれている。同市は、ポルトガルに商館を与えるなど積極的に外国商人を招致する政策をとった。一五三二年に新設された取引所は、「いくつもの言語が入り乱れて一つの騒音と化し、そこではありとあらゆる民族衣装が目もあやに混ざり合っている」と形容されるほどであった。

クレモナ出身のロドヴィコ・グイッチャルディーニは、一五六七年に出版された『ネーデルラント地誌』のなかで、この都市には主要な六つの民族がいたという。それは、ドイツ人、デンマーク・オステルリンク、イタリヤ人、スペイン人、イギリス人、それにポルトガル人であった。このうち、オステルリンクというのは東方人とも訳すことができようが、ハンザ商人のことであり、アントウエルペンへの進出は他の商人に比べてやや出遅れていた。イギリス商人はマーチャント・アドヴェンチャラーズ組合を組織して、ヨーロッパ大陸における毛織物の販路の拠点としてアントウエルペンに定着した。ドイツ商人の筆頭はアウクスブルクのフッガー家であり、一五一九年の神聖ローマ帝国の皇帝位をめぐる選挙では、周知のようにブラバント公であつてすでにスペイン国王カルロス一世となつていたフランドル生まれのカールを後押しした。この時代は、R・エーレンベルクがその書名とした『フッガー家の世紀』ともいえる最盛期であつた。フッガー家はアメリカ産銀の輸入が本格化する以前において、ヨーロッパ最大の銀銅鉱山を経営していた。彼らはアントウエルペンの市況が活性化する以前には、制約の大きかつたヴェネツィアのフ

オンダコ・デイ・テデシ（ドイツ人館）においてその銀銅を販売し、香料を獲得する商活動を展開していた。その視野が、ポルトガルがアントウェルペンをヨーロッパでの販売拠点とすることで大きく変わり、それがヴェネツィアの中継交易の基盤を削ぐことになった。

一六世紀の国際的商業都市アントウェルペンでもっともその彩りを添えた商品は織物であった。そのうち、アントウェルペンを国際的位置に押し上げた要因はいうまでもなくイギリス毛織物であったが、高級で豪華な織物はイタリアからもたらされる絹織物であった。グイッチャルデイニによると、ネーデルラントにもたらされた絹織物はおよそ六〇〇万グルデンにのぼり、これを凌ぐのはイギリス毛織物（八〇〇万グルデン）しかなかったという。

グイッチャルデイニはいう。イタリア各地から、絹織物、金糸・銀糸の織物、ヴィロード、タピストリ、明礬、各種の薬剤がアントウェルペンにもたらされ、「アンヴェルスからは莫大な量のイギリス毛織物、アルマンティエールの毛織物、亜麻布、サージ織、オスターデ、数え切れない種類の小間物や金属製品」をこれまたイタリア各地に送った、と。

歴史家W・ブリュレは、一五六〇年にネーデルラントへ（ということとは、そのほとんどがアントウェルペンにといっている）輸入された最大の品目はイタリア産の絹織物で四〇〇万フロリン、次いでイギリス毛織物で三二四万、三位はバルト海域からの穀物で三〇〇万フロリンであったと試算している（四位はポルトガルの香料で二〇〇万フロリン）。

一六世紀の中頃になると、ネーデルラント地方の経済の中心地としてアントウェルペン市場が揺るぎな

い地歩をしめるようになる。国際的交易の動きについていえば、世紀の中葉ともなるとアントウエルペン市場が、ネーデルラント交易の八割近くをしめるようになったといつても決して過言ではない。アントウエルペン市場が、ネーデルラントの交易そのものを映し出すほどのシェアをもつようになったのである。そこで、ここではもつばらアントウエルペン市場の動向を取り上げることにはしたい。

イタリア交易

一五世紀の四、五〇年代において、すでに英国産羊毛を積載したアントウエルペンの船舶が、当時モロッコ海峡といわれ、その後ジブラルタル海峡と呼ばれるようになる海峡を突破してイタリアに赴いていたことが確かめられるが、一六世紀になると、ネーデルラントを起点とした内陸交易の隆盛期を迎えることになる。この時代は、北ヨーロッパとイタリアを結ぶ運輸はおもに陸路によった。このネーデルラントのイタリア交易が重要な意味をもつのは、その両端に、北は英国が、東にはレヴァント、さらには近東、アジアをも含む広大な交易圏域が広がっていたからである。しかも、中世の遠隔地交易に特有の高級・奢侈品、ないしは特産物に限られず、英国産の毛織物、ネーデルラント産の亜麻布、それにイタリアで製造される絹織物といった工業製品が大きな取り扱ひ品目だったことである。しかも、それ以上に興味深いのは、この内陸交易においては、多数の小商人が参加できたことである。商人の資金力やネットワークを張りめぐらせることのできる大商人だけでなく、小規模の商人が運輸業者に商品を委託することによってこの内陸交易に参加していった。新しい時代の到来であった。

ベルギーの歴史家W・ブリュレが研究した一五四三―四五年のネーデルラントの陸上輸出入交易の実態復元によれば、ネーデルラントからの輸出のほぼ四〇％がイタリア向けであり、残りはドイツ各地へ送られた。

商品の輸出先は、一位がアンコーナで全体の三五％、ヴェネツィアが二位で二九％、ジェノヴァ九％であった。これら上位三都市で、全体の四分の三を占めた。商品の内訳を金額で示すことはできないが、主要な内容は織物であった。もともと、そのすべてがイタリア向けであったわけではないことは、前述したとおりである。数量として最大の部分を占めるのはカージー織と毛織物で、その過半は英国産であったと推定されている。ほかに、サーイ織、フリーズ織、亜麻織物、タピストリ、それに羊毛であった。興味深いことに、胡椒が相当額見られる。

そして、この商品を扱った商人は、イタリア商人とネーデルラント商人であった。イタリア商人が全体の六三％の金額の商品を扱い、ネーデルラント商人が二三％を輸出している。次いでドイツ商人、それにつづくのがイベリア商人であった。

以上はネーデルラントからの輸出入交易であるが、ではイタリア側からの輸出入交易の実態はどのようなものであったろうか。イタリア側、あるいは他の地域からのネーデルラントの輸入の実態について、輸出で見たのと同様のレベルでそれと対をなすような史料は、残念ながら見当たらない。だが、別の史料（一五六七年、英国ロンドン港の輸入ポート・ブック）から見たとき、このアントウェルペン港を経由する商業交易の姿をかいま見ることができる。つまり、イタリアからネーデルラント、アントウェルペンへて、

図1 商品の輸出先

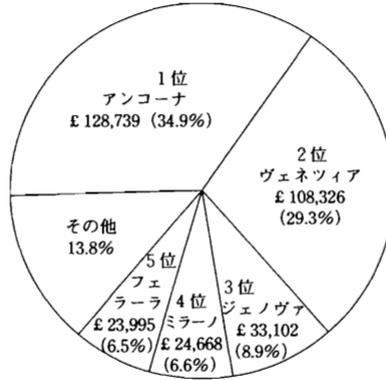
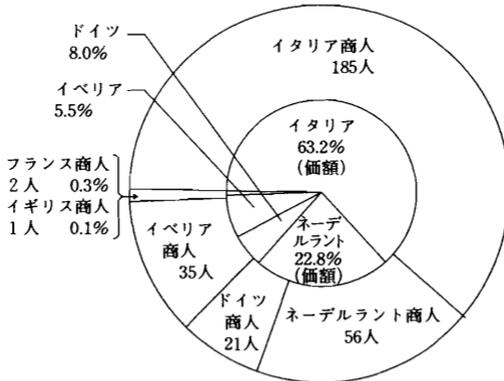


図2 国別商人数と積荷価額の比率



出典) 中沢勝三『アントウェルペン国際商業の世界』

英国のロンドン港に陸揚げされる交易である。それによると、明らかにイタリア産、あるいはイタリアを経由してアントウェルペンに輸入された商品群として、絹織物、ファスチアン織(ジェノヴァ製)、タフタ織があり、しかも、アリュージュについて小額の例外はあるものの、英国に輸入される交易において、アントウェル

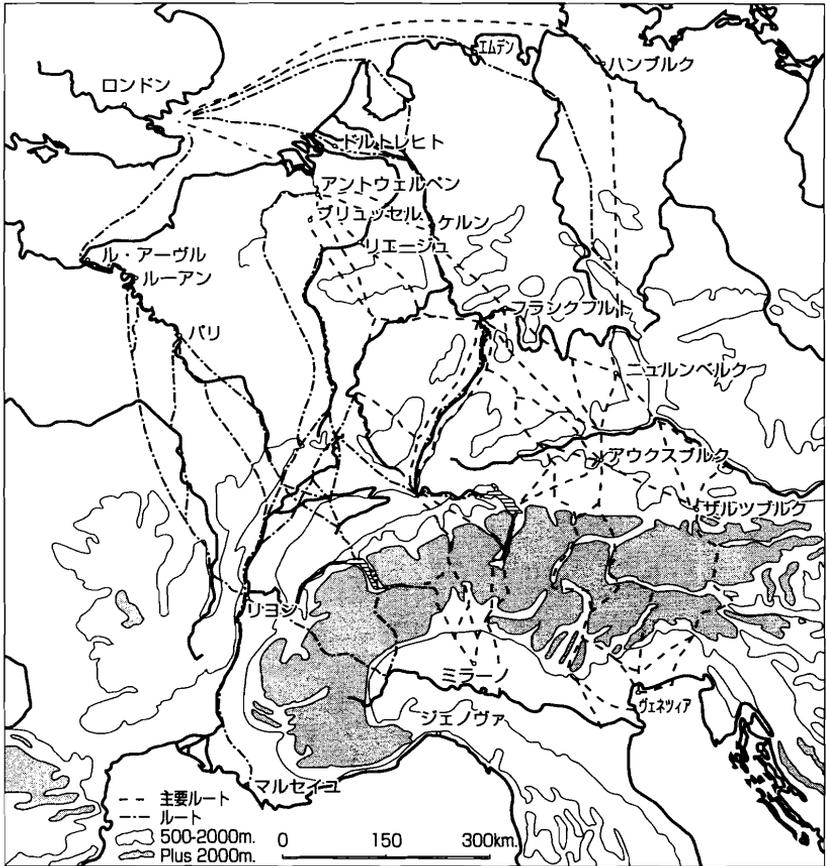
ペンがほとんど唯一のチャンネルになっていることが判明する。アントウエルペン経由でロンドンに輸入されたタフタ織のなかには、中近東産を意味する「レヴァント」という地名の付されたもの、またルツカ、フィレンツェというイタリア都市名のついたものも含まれている。

内陸交易の輸送について見ると、ネーデルラントからイタリアに向けていくつかのルートがあったが、大きく分けると西ルートと呼ばれるフランスからスイスのバーゼルへ向かうルート（これはロレーヌを経由するものとライン川を航行するものとに大別された）で、サン・ゴタール峠を越えてミラーノやジェノヴァに達した。もう一つは東ルートで、アントウエルペンを発してケルンからニュルンベルク、アウクスブルクをへてブレンナー峠でアルプスを越えるルートである。また、アウクスブルクからは、ザルツブルクを通ってヴェネツィアに向かう道筋もあったが、いずれにしても、アルプスを越える必要があった。これらの荷物は船で、あるいは四頭以上の馬で引かれた荷車で運ばれた。

ネーデルラントとイタリアとのあいだには内陸ヨーロッパ、つまりドイツとスイス、オーストリアなどの諸邦が広がっている。内陸ルートはこれらの諸地域との結びつきなしには成り立たず、とりわけ、低地ライン地方との関係が深かった。そのなかで際立って深い関係を有したのがアントウエルペンとケルンとの関係で、「アントウエルペン・ケルン枢軸」(H・ケレンペンツ)ともいわれるほど、興隆と衰退の運命をともした。

ケルンは一六世紀において「西ドイツ経済の首府」(ケレンペンツ)といわれるほどの繁栄を享受したが、商業都市であっただけではなくて、金属・皮革産業などを有した産業都市でもあった。この都市は、

図3 交易ルート



出典) W. Bulez, 'Les routes commerciales d'Angleterre en Italie au XVIe siècle', in: *Studi onore di A. Fanfani*, IV, Milan, 1962.

一五世紀以降アントウェルペンの発展と密接な連携によって発展への道をたどった。ケルンは、英国との商業においてイベリア、またここで論じたイタリアとの商業交易関係においてアントウェルペンを重要な中継地、ないし窓口としていた。アントウェルペン市場が崩壊する過程で多数の商人の逃避地となったのは、これらの深い結びつきのゆえであろう。

また、この内陸交易には、多数の専門的な運送業者が商品の運送に関与した。アントウェルペンには、運送業者の多くの出身地であるヘッセンの地名を冠した「ヘッセン館」が一五六四年に建造された。

ネーデルラントと地中海世界の結びつきを物語る興味深い事例がある。以上述べた地域に沿って、イベリア半島からアントウェルペンへ、その後ヴェネツィアへ、そして最終的にはオスマン帝国のナクソス島へと移住したメンデス家のケースである。彼らはもともとポルトガルに住むユダヤ教徒であったが、キリスト教に帰依し「新キリスト者」と呼ばれた改宗ユダヤ人であり、「マラノス」といわれた人びとに属する当時の主導的な金融家であり、香料貿易商である。やがて、迫害を逃れてヴェネツィアに逃れるが、その取引網は「アントウェルペンからパレスティナ」(F・レイン)まで広がっていた。このうち、当主であったジョアン・メンデスはオスマン帝国に移住し、ユダヤ教徒に戻って名前をヨセフ・ナシイと改め、メフメト二世下の金融家となりナクソス公となった。彼は、オスマン帝国のキプロス島攻略の教唆者であったと今日では考えられている。

イベリア交易

ネーデルラントのイベリア半島との交易はどのようなものであったろうか。先に一五世紀後半のブリュージュ市場について見た「大西洋地中海」といわれたアフリカ西沖のアゾレス、カナリア諸島で展開された熱帯産物である砂糖キビ栽培による砂糖生産は、一六世紀に入ってアントウエルペンで最盛期を迎える。未精製砂糖を輸入した砂糖の精製加工産業がこの都市で繁栄した。これには、ブラジルでの砂糖栽培をおこなったネーデルラント商人エラスムス・スヘッツを代表とするスヘッツ家が際立った活躍を示した。

ネーデルラントとイベリア半島との交易活動について見てみよう。ベルギーの研究者プリルの一五五〇年代についての研究によると、以下のようなものであった。ネーデルラントからの輸出は、大部分がアントウエルペンからのものであったと考えられるが（七八％）、二位はいずれもブリュージュで一二％、その約三分の一は繊維品関係であった。次いで、小間物一〇％、金属七％とつづく。

繊維製品のうち、もつとも重要なものが亜麻織物であり、全体の二九％、繊維関係の四四％をしめる。亜麻織物には製造地の都市名がついており、アウデナールデが三分の一をしめる。次いで毛織物について見ると、金額でホラント、ハールレム、英国、ロッテルダムの順で、製造都市ないしは地域が判明する。サーイ織については、ライセルという都市五五％、ホントスホーテの地名のついたものが四一％である。これらのデータから、亜麻織物とサーイ織はおもに南ネーデルラントで製造されたものがイベリア半島に輸出され、毛織物については、英国製と北部ネーデルラントの製品が輸出されていた動きをつかむことができる。

そのほかの品目について見ると、金属の三分の二は原料でその大半は銅であり、染料の三分の二近くは茜あかねがしめる。また書籍、亜麻、家具といった品目も並んでいる。

ネーデルラント側の輸入について見よう。ここでは、香料が総額のほぼ半分で四九・七%をしめている。香料の八八%は胡椒である。次いで繊維原料（ほぼ全額を羊毛がしめる）一四%、砂糖一三%、油脂七・五%である。砂糖の産地別では、アフリカ・ギニアのサン・トメが半分、油脂のほとんどはオリーフ油で、食料（全体の六・五%）の半分以上は塩である。

イタリアとの交易で見たようにケルンは、イベリアとの交易においてもアントウエルペンをもっとも重要な中継地とした。一五四〇年代には、ポルトガルのマデイラやアゾレス諸島の大量の砂糖がアントウエルペンで精製され、ケルンに運ばれたし、また各種の香料がアントウエルペンからもちこまれた。そして、スペインからの木材や皮革などの輸入も、おもにアントウエルペンを介しておこなった。

3 オランダと地中海交易

一六世紀末の危機と地中海交易

こうしたネーデルラント、とくにその商業交易の中心地であったアントウエルペン市場を舞台として展開された経済活動において、スペイン、ポルトガル、そしてイタリア商人、さらにはネーデルラント商人の対南欧交易における活躍には目覚ましいものがあつた。だが、一五六〇年代を転機として、こうした活

況を呈したヨーロッパの交易・商業活動にはしだいに暗雲がたちはじめる。この頃から、ハプスブルク朝スペイン治下ネーデルラントではプロテスタント系諸派に対する異端弾圧が強化されだす。また一五五八年にエリザベスが英国女王となり、テューダー朝英国対ハプスブルク朝との、そしてやがては一六世紀後半の国内の宗教争乱を終息させてヨーロッパの国際的舞台上に登場するフランスとの角逐が、ヨーロッパ大陸を縦断するボーダーレスな商業活動を事実上制約することになっていく。

ハプスブルク・スペインは、プロテスタント系新教の浸透にともなつて不穏な情勢となつたネーデルラントに向けて、イタリア北部のミラーノから北上しルクセンブルクをへてリエージュからブリュッセルにいたる重要な軍事ルート、いわゆる「スペインの道」にその精銳の軍隊を走らせることになる。一五六八年以後長期にわたる「オランダの反乱」（オランダ人のいう「八〇年戦争」）は、独立が国際的に信任される一六四八年までつづく」といわれる戦乱の過程で、フランドルをはじめとする南ネーデルラントはしだいにスペインの軍門に服し、アントウエルペン市は一年におよぶ包囲戦をへて一五八五年に陥落する。中世以来ヨーロッパの先進的経済の一角をしめつづけた南ネーデルラント地方は、長い外国の政治的支配を受けるようになったのである。そしてアントウエルペンをはじめとして、南ネーデルラント、フランドルの商人や職人が、北部ネーデルラントやケルンなど内陸ドイツ、北ヨーロッパに大規模な移住を開始した。これらの移住者によつて、南ネーデルラントの経済力が、人的、資本的、そして技術的なレベルでオランダに、そして英国や北部ドイツに移植されたのである。アントウエルペンは苦境を脱するために、それまでの立場をかえてユトレヒト同盟側、つまりオランダ側に立った。だが、スヘルデ河口が反乱側によ

つて閉鎖されつづけたために、英国毛織物商人団体であるマーチャント・アドヴェンチャラーズ組合は、一五六四年に大陸での販売拠点をアントウエルペンからエムデンに移すことになる。その後も、アントウエルペンにかわりうる市場を探して遍歴を重ねたが、ついにその代替市場を確保することはできなかった。

次いで、スペインとの戦いの過程で独立を維持したオランダが、スペインと一六〇九年に締結した「二年の講和」条約によって、オランダ連邦共和国の事実上の独立が確定し、それ以後「一七世紀オランダの時代」が到来することになる。とりわけ、一六一八年における「三〇年戦争」の勃発は、ヴェネツィアのレヴァントやアジアの産物を扱う陸上内陸交易を完全に壊滅させた。こうして、かつての南欧人の、地中海人の活躍の舞台は大きく後退し、国家の時代となっていく。

オランダの地中海交易

一六世紀の中葉までの繁栄の時代におけるヨーロッパの遠隔地交易の中心が陸上運輸であったことはすでに述べたとおりであるが、内陸交通路であったドイツが一六世紀の後半以後に政情不安定になるにつれて、繁栄を謳歌したこの陸上ルートは後退していき、次いで海上輸送がこれにとつてかわっていった。ネーデルラントからの海上交易ルートは、ジブラルタル海峡を通過するルートである。新生オランダからこの海峡を突破する交易は「海峡通過交易」と呼ばれた。

一六世紀末から一七世紀のはじめにかけて、オランダ連邦共和国が南ネーデルラントからの離散した多

数の商人や産業人を受け入れて、その経済力を飛躍的に向上させ、ネーデルラント経済の重心は南から北のオランダに決定的に移った。その移住者のなかに資力を有したユダヤ人がいたことはいうまでもない。

この間、北部ヨーロッパから地中海へ向けての「海峡通過交易」といわれるジブラルタル海峡を突破する海上運輸貿易が本格化し、英国もまたオランダと同様一五八〇年頃からこの交易活動に参画してくる。いうまでもなく当初は、イギリス人、フランス人、ハンザ同盟の商人のなかで、オランダ人が断然他を圧倒するシェアを誇った。

ところで、オランダの地中海交易の興隆の契機は、研究史の上ではこれまでバルト海から地中海への穀物の輸送にあったと考えられてきた。だが、近年にいたって歴史家イスラエルらの研究では、その中継交易の中心は穀物取引ではなく、「豊かな交易」といわれる、イタリアの絹織物などの高級な繊維製品、それに香料、銀との交換が主流であると考え直されるようになってきた。

オランダの地中海交易は、この時期、当初は穀物の輸出貿易によって本格的に開始された。イタリアにおける凶作、レヴァント地方との交易の停滞によってイタリアで穀物の不足が深刻化し、バルト海地域から地中海へ向けての穀物貿易に深く関与したが、その後、拡大と多様化の時代に入っていく。これには、オランダの実質的独立を画したといわれるスペインとのあいだの一六〇九年の「一二年の講和」条約によって、オランダ人の交易活動の不安が取り除かれたことが多大な影響を与えた。この講和条約は、一六二一年に失効し、オランダはスペインとのあいだでふたたび戦争をおこなうことになる。この戦争で地中海交易は一六二〇年代から世紀の中頃にかけて停滞局面を迎えたが、その後、世紀の中頃に地中海交易は最

盛期に入る。そして、オランダの地中海交易は一六八八年になり、今度は逆に劇的に収縮していくことになる。

交易の趨勢はおおむね以上のとおりであったが、交易の内容、構造から見ると、この間根底からその特質に変化が生じた。一七世紀のオランダは西地中海において、イベリア半島とイタリア間の中継交易を相当部分担うことになった。具体的には、オランダの船舶がカステイリヤの羊毛、バレンシアの塩、ポルトガルの砂糖をジェノヴァ、リヴォルノ、そしてヴェネツィアに運搬したのである。

アムステルダムがヨーロッパの植民地物産の中心地的な市場となって興隆した。一六〇二年に創設されたオランダ東インド会社が、希望峰経由の香料交易においてポルトガル商人の地歩を完全に奪ったからである。そしてまた、オランダ船が地中海からオランダへのアジア産物資を供給することになった。一六〇二年以後、ヴェネツィアを通る交易量は劇的な低下を見たのである。ジェノヴァもまたしばらくは命脈を保ったものの、一六二七年のスペイン国庫の破産後、急速にその交易量を減じた。

結 び

「ネーデルラントから見た地中海」とは、さまざまな視点から考察することが可能である。ベネルックスと呼ばれるようになったこの地域は、現在、まさしくヨーロッパの中心に位置するだけでなく、さまざまなレベルでヨーロッパの真ん中にある。EU本部がそこに位置し、ブリュッセルには、イタリアをはじ

め地中海各地のレストランが並んでいる。「ベルギーという国家をヨーロッパに解消してしまった」という党ささ政権担当政党にある。深い歴史的關係を有するネーデルラントと地中海を、ここではおもに、失われた今日復活したともいえる内陸交通の世界、人との流れについて顧みてみた。

〔参考文献〕

- I・ウォーラーステイン（川北稔訳）『近代世界システム 一六〇〇年～一七五〇年』名古屋大学出版会、一九九三年。
- 小岸昭『マラーノの系譜』みすず書房、一九九四年。
- 中沢勝三『アントウェルペン 国際商業の世界』同文館、一九九三年。
- F・ブローデル、村上光彦訳『世界時間』みすず書房、一九九六年。
- M・モラ、深沢克巳訳『ヨーロッパと海』平凡社、一九九六年。
- J. I. Israel, *Dutch Primacy in World Trade, 1585-1740*, Oxford, 1989.
- F. C. Lane, *Venice. A maritime republic*, Baltimore and London, 1973.
- J. D. Tracy, ed., *The Rise of Merchant Empires*, Cmbriage, 1990.
- H. Van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy*, The Hague, 1963.
- J. A. Van Houtte, *An Economic History of the Low Countries, 800-1800*, New York, 1977.

（中沢勝三）